

《論 文》

中国における鷓鴣詩の変遷

池間 里代子

はじめに

池間は「小説『紅樓夢』にみえる鳥についての考察」(流通経済大学論集第45巻第1号2010年7月)及び「異文化受容の諸相—牡丹と鷓鴣をめぐる考察—」(日本大学『国際関係研究』第31巻2号 2011年2月)において鷓鴣に言及したが、鷓鴣のメタファーが時代によって変遷があるという視点に欠けていた。そこで本稿では、中国において鷓鴣がどのように現われ、その意味がどのように変遷していったのかを考察する。また、資料として「代表的な鷓鴣詩」作製し、唐・北宋・金・南宋・元・現代ごとに分類、巻末に示した。

1. 鷓鴣について

鷓鴣はキジ科の小型鳥で中国南部・東南アジア・インドに生息し、野生では熱帯・亜熱帯の灌木林や低地に生息する。飛ぶのが苦手だが足の力が強いと言われている。

鷓鴣に関するもっとも古い記述は、漢の許慎『説文解字』(2世紀)であると考えられるが、「鷓鴣鳥名。(鷓鴣は鳥の名である)」としか記されていない。¹⁾

西晋(3世紀)左思『呉都賦』には「鷓鴣南翥而中留。」とあり、鷓鴣は夜飛ぶときに木の葉で背を遮り覆うので「遮」を用いる、という説もある。²⁾

梁(6世紀)の顧野王『玉篇』では「異物記云：鷓鴣白黒成文，其鳴自呼，象小雉。其志懷南，不北徂也。『古今注』³⁾云：南方有鳥名鷓鴣，向日飛，畏霜露，早與暮出稀。(鷓鴣は白黒の模様で、自分の名を呼び、小型の雉のようだ。南を懐しんで、北へは飛ばない。『古今注』にこうある：南方に鷓鴣という名の鳥がいて、太陽に向かって飛び、霜や露をおそれ、早朝や暮には見かけない)」とあり、少し詳しくなってきた⁴⁾。

唐の顧況（725-814）『聽山鷓鴣』には「踏歌接天曉 tàgējīetiānxiǎo（ステップダンスの歌声が夜明けの空に響く）」であると言っている。⁵⁾

唐の段公路（?-?）は『北戸録』で「衡州の南に鷓鴣が多い。嶺南の野葛，諸菌の毒を解き，および温瘴を辟ける…『古今注』によると，飛ぶ時はすぐ樹葉でその身を覆う。」とある。⁶⁾

同じく唐の段成式（803?-863?）『西陽雜俎』には「鷓鴣毎月只飛翔一次。（鷓鴣は毎月一度しか飛ばない。）」とかその鳴き声が「向南不飛 xiàngnánbùfēi」「懸壺盧繫頸 xuánhúlújìjǐng」というなどとある。⁷⁾ 別名に「越雉・懷南」があり，鷓鴣（zhègū）という名はその鳴き声によって付けられたようだ。

北宋の寇宗奭（?-?）『圖經衍義本草』三十「鷓鴣」に「江南に産する。形は母鷄に似ている。鳴き声が鉤輮格磔というのがそうである。」という。また「東西にとびまわるけれども，翅を開げるときは必ず，まず南へむかってとびあがるとある。だが，崔豹の『古今注』に，その名はみずからそう呼ぶというように鳴くのがそれである。」といい，これは「向南不北 xiàngnánbùběi」ときこえる鳴き声に，いわば擬声語に意味をこじつけた解釈をひき，それを反駁したものである。」とある。⁸⁾

また，行不得也哥哥 xíngbùdéyěgēgēという聞きなし（鳥の声に何らかの意味を与えること）は南宋より後に目立つ。例えば：

南宋の鄭剡（?-?）「行不得也哥哥，瘦妻弱子羸犝馱，天長地闊多網羅。南音減少北音多，肉飛不起可奈何，行不得也哥哥。」

元の薩都刺（1308-?）「行不得也哥哥，九關虎豹高嵯峨，行不得也哥哥！」

明の邱濬（1418-1495）「行不得也哥哥，十八灘頭亂石多。東去入閩入廣，溪流湍駛嶺嵯峨，行不得也哥哥。」

などの例に見える。ここからは「旅程困難」というメタファーも見えてくる。

明の李時珍（1518-1593）『本草綱目』では「…多對啼。今俗謂其鳴曰，行不得也哥哥。…（多く互いに鳴き合う。今俗にその鳴き声を「行けませぬお兄さま xíngbùdéyěgēgē」という）」と紹介している。⁹⁾

同じく明の王圻（1529-1612）『三才圖會』にはその鳴き声を「鉤輮格磔 gōuzhōugézhé（カギ・ナガエ・タナ・鳥の鳴き声）：すべて偏を変えた一種の言葉遊び」だと紹介している¹⁰⁾。

これは唐の李群玉（813?-860?）「正穿屈曲崎嶇路，又聽鉤輮格磔聲。」や南宋の姚勉（?-?）「晨陰涼潤疑秋蕭，格磔鉤輮叫雲木。似催農夫急腰鎌，村北村南麥皆熟。」を下敷きにしていると思われる。

現在では「十二兩平平 shìèrliǎngpíngpíng」と、自分の体重をいうそうだ¹¹⁾。「兩」は

「斤（500グラム）」の十分の一を指すので、12両だと600グラムになる。

以上をまとめると、鷓鴣は最初「zhègū」という鳴き声より鷓鴣と名付けられたらしく、飛ぶ時に樹葉で身を覆うという特性から「遮」の「庶」を用いて作字されたようである。唐代では「向南不飛 xiàngnánbùfēi」「懸壺盧繫頸 xuánhúlújìjǐng」「鈎輅格磔 gōuzhōugézhé」「踏歌接天曉 tàgējìetiānxiǎo」などと鳴くとされた。宋代には「行不得也哥哥 xíngbùdéyěgēgē」が広がり、「十二兩平平 shíèrlǎngpíngpíng」などのバリエーションも出現した。

こうしてみると、鷓鴣という鳥の実態はあまり重視されていないが、「懷南」というメタファーと、聞きなしのバリエーションが比較的多いといえる。

中国の文学作品の中では唐代から「聞きなし」が比較的多くみえる。以下に挙例する。

- ・王維（699？ - 759？）『聽百舌鳥』「入春解作千般語 rùchūnjiězuòqiānbānyǔ（春になったのでどんな言葉も分かるぞ）」：モズ
- ・李白（701 - 762）『宣城見杜鵑花』「一叫一回腸一斷 yíjiàoyihuíchángyíduàn（ひと鳴きひと回りすればはらわたが千切れる）」：ホトトギス
- ・韋應物（736 - 791）『聽鶯曲』「欲轉不轉意自嬌，羌兒弄笛曲未調 yù zhuàn búzhuànyìzìjiāo, qiāoérnòngdíqǔwèidiào（さえずろうとさえずらずとも可愛らしく、笛の得意な羌が笛を吹こうとしても敵わない）」：ウグイス
- ・梅堯臣（1002 - 1060）『黃鶯』「最好聲音最好聽，似調歌舌更叮嚀 zuìhǎoshēngyīnzū ihǎotīng, sìdiào gēshé gèng dīngníng（一番良い声が一番素敵だ、歌を唄う舌の調整はさらに念入りだ）」：ウグイス¹²⁾ などが見える。

これらの鳥は実物を見聞することが多かったと思われるが、鷓鴣は南方の鳥であることから実際に見る機会は大変稀であると考えられる。であるにもかかわらず、聞きなしのバリエーションが比較的多いのは、詩のテーマとして「懷南」が好まれたのではないだろうか。

なお、鷓鴣は中古音でtʃia - koであり、『中国动物图谱』ではkee - kee - kee - karr - と、『中国经济动物志』ではhee - hee - hee - ga - gaと表記されている。「多く対して啼く」とあるが、一羽がなきはじめると近くにいるものもすぐにこれに加わるという鷓鴣の習性（『アニマルライフ』）に合致する。¹³⁾

2. 唐代における鷓鴣詩

鷓鴣についての記述は漢代から見えるものの、鷓鴣をテーマとした作品は唐代を始めとするようである。では、唐代において鷓鴣はどのような意味を持っていたのだろうか。この時代の鷓鴣詩を概観すると、いわゆる「本意」で作られたものが多い。すなわち、鷓鴣は南方の鳥なので唐人にとっては異郷の鳥であった。その鳥が故郷を懐かしんで悲

しげに鳴く。おそらく飛ぶのが苦手なので、人間によって北へ連れてこられたのだろうか、望郷の念をうたう際に用いられた。

望郷の念を表わす鳥にはホトトギスもいる。その特徴は鳴くときに嘴を目一杯開け、真っ赤な舌が見えることから「血を吐くような強い哀しみ」を暗示していた。そして鳴き声は「不如帰去bùrúguīqù（帰った方が良い）」と聞こえ、詩人の望郷の念を刺激する。しかし、飛ぶのが得意なホトトギスは「帰った方が良い」と言って詩人を置き去りにするだけだ。それに比べると鷓鴣は飛びもせず、異郷で悲しげに鳴くのみである。そこに唐代詩人の心情に沿った形象が見出されたのではないだろうか。また、一説によるとホトトギスは互いに鳴きあうが、先に鳴くものは血を吐いて死ぬとか、最初に鳴いた声を聞いたものは別離にかかわりがある、という。¹⁴⁾ 鷓鴣はそこまで痛烈な別離を暗示してはいないようだ。

次に、唐代で作られた鷓鴣詩を概観する。なお、数字は本稿末に示した「鷓鴣詩一覧」による。

①李嶠（644—713）「鷓鴣」

可憐鷓鴣飛，飛向樹南枝。南枝日照暖，北枝霜露滋。露滋不堪棲，使我常夜啼。原逢雲中鶴，銜我向寥廓。願作城上鳥，一年生九雛。何不舊巢住，枝弱不得去。

何意道辛苦，客子常畏人。

可哀そうに鷓鴣が飛ぶ、南の樹へ向かって。南の枝は陽で暖かく、北は霜露に濡れているから。露に濡れては棲めないから、夜通し鳴く。元々雲中の鶴に会いたかったけれども、私を寂しいところへ追いやった。町の鳥になって、一年に九羽も雛を育てたかったけれども。古い巣には棲めないし、枝が弱くて行けない。どうして苦勞するのだろうか、旅人である私はいつも人をおそれている。¹⁵⁾

李嶠は鷓鴣の属性である「飛ぶのが苦手な南方の、霜露に弱い鳥」を詩にうたった。この作品によって唐代詩人たちの創作意欲に火がついたようで、李白は2首作った。そのうち人口に膾炙しているのは『月中懷古詩』だが、『山鷓鴣詞』にも「苦竹嶺」という南方を連想する名の山をうたいこんで、実景らしい作品にしている。

②李白（701—762）「山鷓鴣詞」

苦竹嶺頭秋月輝，苦竹南枝鷓鴣飛。嫁得燕山胡雁婿，欲銜我向雁門歸。
山雞翟雉來相勸，南禽多被北禽欺。紫塞嚴霜如劍戟，蒼梧欲巢難背違。
我今誓死不能去，哀鳴驚叫淚沾衣。

苦竹嶺に秋の月が輝き、苦竹の南枝に鷓鴣が飛ぶ。燕山の雁どんに嫁ごうとしたけれど、雁のおうちから追いやられた。鶏や雉が勧めてくれた、南の鳥はよく北

の鳥にだまされるよと。関所は霜が剣のようで、青桐を巢材にしようとしても背負にくい。私は今行けないと、悲しい鳴き声が涙を絞る。

③李白「月中懷古詩」

越王勾踐破吳歸，義士還家盡錦衣。宮女如花滿春殿，只今惟有鷓鴣飛。

越王勾踐が呉を破って帰ってきて、兵士は帰宅し錦を飾った。かつて宮女が花のようにぎっしり集った呉の御殿は、今はただ鷓鴣が飛ぶだけだ。

白居易は樂府体で「山鷓鴣」という長い作品を作った。彼も李白の「苦竹嶺」を継承し、悲しくして夜通し鳴く様を想像している。

⑦白居易（772-846）「山鷓鴣」

山鷓鴣，朝朝暮暮啼復啼，啼時露白風淒淒。黃茅崗頭秋日晚，苦竹嶺下寒月底。畚田有粟何不啄？石楠有枝何不棲？迢迢不緩復不急，樓上舟中聲聞入。夢鄉遷客展轉臥，抱兒寡婦彷徨立。山鷓鴣，爾本此鄉鳥，生不辭巢不別群，何苦聲啼到曉？啼到曉，唯能愁北人，南人慣聞如不聞。

山鷓鴣や、朝な夕なに鳴いてるが、鳴くときは露が白くて風ピューピュー。黄色い茅の咲く岡はすっかり秋が日暮れ、苦竹嶺の下には寒々しい月が出たよ。田圃には粟があるのになぜ食わぬ？石楠に枝があるのになぜ棲まぬ？はるかにたゆまらず焦らず、町に居ても船に乗ってもその声が聞こえる。夢に故郷へ帰って寝がえりをうち、子供を抱えるも妻を失い茫然と立ち尽くす。山鷓鴣よ、おまえは元々この鳥だ、生まれて巣立たず仲間とも別れず、なぜ朝まで悲しげに鳴く？朝まで鳴いたって、北の人を悲しがらせるだけで、南の人は聞き慣れていてどうってことはないのだぞ。

李白・白居易ともに鷓鴣詩の季節を秋に設定しているが、竇鞏や杜牧の作品では春の詩に鷓鴣を登場させている

⑨竇鞏（?-?）「南遊威興詩」

日暮東風春草綠，鷓鴣飛上越王臺。

日が暮れて春風が若草をなで、鷓鴣が越王のうてなを飛ぶ。

⑩杜牧（772-846）「越中詩」

石城花暖鷓鴣飛，征客春帆秋不歸。

石城は暖かく花が咲き鷓鴣が飛ぶ、客船は春出発するも秋に帰らない。

温庭筠に至っては女性の耳飾りである「金鷓鴣」を描写し、彼女の物憂げな感情を暗喩している。

⑪温庭筠（812—866）「菩薩蠻」

小山重疊金明滅，鬢雲欲度香腮雪。懶起畫蛾眉，弄妝梳洗遲。照花前後鏡，花面交相映。新帖繡羅襦，雙雙金鷓鴣。

小山のような屏風がキラキラと煌き、雲のような鬢は雪のように白い肌にしだれるかのよう。やっと起きだして蛾眉を描くも、洗顔身支度が進まない。

花のかんばせを鏡に映せば、花のおもてが前後に映る。新しいぬいとりのある肌着を着けると、金の鷓鴣が両耳で揺れる。

そして、鄭谷は春という季節のなかで別離を表現し、「春風」と「鷓鴣」とが結びつけられるようになった。

⑫鄭谷（849—911）「席上貽歌者」

花月樓臺近九衢，清歌一曲倒金壺。

座中亦有江南客，莫向春風鳴鷓鴣。

美しい花や輝く月に彩られたたかどのは九衢に近く、清らかな歌声は金の酒壺にしみ入るようだ。この宴席には江南出身のお客もいることであるし、春風に向かって鷓鴣を鳴かすことのないように。（南を思い出してお気の毒だから）

唐代鷓鴣詩の特徴は、はじめは秋の寒々とした景色の中に鷓鴣が悲しげに故郷を偲んで鳴いていたのが、だんだんと「別離の感傷」「春」に鷓鴣が配されるように変化してきたことである。そして、この傾向はますます加速していく。

3. 北宋における「鷓鴣天」詞

唐末に発生し五代十国を経て北宋に流行した「詞」という文学形態に、「鷓鴣天」という詞牌（題名）が登場した。その形式は前闕（前半）が「7・7・7・7」^ツ、後闕（後半）が「3・3・7・7・7」の双調55文字である。思うに、七言律詩を前後に分けて後半の出だしを「3・3」に変調したもので、比較的早期に完成した詞牌ではないだろうか。というのも「詞」は別名を「長短詩」ともいい、定型詩に比べるとかなり字数に自由さがあるのだが、「鷓鴣天」では後闕の出だしに変化しているだけで、他は七言で揃っているからだ。なお、後闕出だしの平仄は「○●●●、●○○」となっている。¹⁶⁾ その理由は笛曲「鷓鴣飛」がヒントとなろう。すなわち、唐代に笛曲「鷓鴣曲」が流行したそうだ

が¹⁷⁾、おそらく鷓鴣の鳴き声を模した曲だった。その曲がそのまま「鷓鴣天」に繋がっていったと考えれば、後闕「3. 3」の3文字目を仄声、その次の冒頭も仄声のまま低く続き、最後に平声へ戻る一連の「低→高」がみえる。宋人は鷓鴣の鳴き声は聞いたことすらないはずだが、大層かなしげな鳴き声だと理解したのだろう。それを「低→高」で表現したのではないだろうか。

なお時代は下るが、明銘論文では「金元時代に北方で鷓鴣曲が流行していた。」「元代の関漢卿は鷓鴣曲が歌えた。(音程の上下が結構激しい由)」ことが指摘されており、鷓鴣曲は音程上下の激しい曲であったことがうかがえる。当然詞牌にも反映されていると考えるのが妥当であろう。¹⁸⁾

次に、内容面を調べてみると北宋では唐末同様に「別離の感傷」としての使用例が多い。ことに、詞牌となってからは詞書(ことばがき)に作詞時の情景を言う場合が増えてきた。

なお、宋词だけで「鷓鴣天」作品は657首あるそうで、人気の程が窺える。¹⁹⁾

⑳聶勝瓊(?-?)「鷓鴣天：寄別李生」

玉惨花愁出鳳城。蓮花樓下柳青青，尊前一唱陽關後，別箇人人第五程。

尋好夢，夢難成。況誰知我此時情。枕前淚共簾前雨，隔箇窗兒滴到明。

麗しのあなたが心みじめにこの街を出て行く時ですら、蓮の花が生い茂るたかどの下には柳が青々としていた。私は酒樽の前で「陽関(王維“西出陽関無故人”が典故の、別れの歌)」を一度うたった後、名残が尽きずに三疊が五疊にまで長引いてしまった。

良い夢をさがそうにも、夢は本当にはなりがたい。誰がこのときの私の心をしりえようか? 枕の前には涙とともに御簾越しに雨が降る。窓を隔てて涙も雨も夜が明けるまで滴り落ちるばかり。

この詞は「有誰知我此時情」という題名で鄧麗君(テレサ=テン)が唄っており、今ではユーチューブでも見ることが可能だ。聶勝瓊は、生年などは不明ながら実在した妓女で、詞書にもみえる李生という男性が彼女から離れてしまい、この詞を作ったところ彼が戻ってきたという伝説もある。

また、『詞譜』にも挙げられているが、この時代の「鷓鴣天」代表作は晏幾道(1048-1118)で、「鷓鴣天」は八首確認できる。

㉑十裡樓臺倚翠微，百花深處杜鵑啼。殷勤自與行人語，不似流鶯取次飛。

警夢覺，弄晴時，聲聲只道不如歸。天涯豈是無歸意，爭奈歸期未可期。

多くのたかどのが青山に寄りかかるように建っており、たくさんの花の深いとこ

ろで鷓鴣が鳴いている。私は通り過ぎていく人とねんごろに語りあっており、ウグイスのようにどんどん飛んでいくのとは違うのだ。

夢から覚め、晴れわたった時、口々に「帰った方がよい」という声が聞こえる。帰る気持ちがないというのか？ 帰る時期がまだ分からないだけだよ。

この作品の下線部分「百花深處杜鵑啼」は、後述するようにいつしか「ホトトギス→鷓鴣」に変換する。そして、禅語において「実在そのもの」という評価を得るまでになるのだ。

4. 南宋における「鷓鴣天」詞

金の圧迫により南下せざるを得なくなった南宋では、恐らく詞人自体が鷓鴣の故郷である南方に来てしまったので、もはや単なる詞牌として扱う者も出てきた。わざわざ「送人」という詞書でもって断らない場合は、別離が歌われているとは限らないのである。しかも、その別離も完全に「人間」の別れがテーマとなっており、鷓鴣という典故は用いられていない。

またこの時代では、戦乱が落ち着くに従って文化方面に余裕ができ、茶に付随する形で磁器製作が盛んに興ってきた。鷓鴣の胸に真珠のような斑点があることから「鷓鴣斑」という文様が考案され、茶碗の紋様として定着した。日本では曜変したものが珍重され、国宝となっている。

南宋における鷓鴣詩は、以下が代表的である。とりわけ辛棄疾の作品が多い。

李清照 (1084—1153?)

⑦暗淡輕黃體性柔，情疏跡遠只香留。何須淺碧深紅色，自是花中第一流。

梅定妒，菊應羞，畫欄開處冠中秋。騷人可熬無情思，何事當年不見收。

暗く淡く軽い黄色の体はまた柔らかく、人がまばらな遠い道へも香だけが留まっている。どうして葉がうすく花が深紅でなければならないのだろうか、これこそが花の第一流である。

梅は嫉妬し、菊は恥じ入るだろう。美しいおばしまの所に中秋の冠と輝いている。かの屈原はどうして情緒がないのだろうか、なぜか当時の彼の詩にすばらしいこの花（キンモクセイ）が入っていないのだ。

辛棄疾 (1140—1207)

⑧陌上柔桑破嫩芽，東鄰蠶種已生些。平岡細草鳴黃犢，斜日寒林點暮鴉。

山遠近，路橫斜，青旗沽酒有人家。城中桃李愁風雨，春在溪頭薺菜花。

畔にはやわらかく芽吹いた桑，東隣では蚕がもう生まれている。平らな岡にまだ細い草が生え黄色い牛が鳴いている。陽が傾くと林に鳥が数羽みえる。
山はそこかしこに，道は縦横に。青い旗の店では酒を売っている。町では桃や李の花が風雨を嘆いているけれど，また春は谷のそばに咲くナズナの花にも来る。

さらに，宋代に大いに広まった禅宗では鷓鴣に関して宋（11世紀）圓悟克勤（エンココクゲン）『碧巖録』第七則に

江國春風吹不起，鷓鴣啼在深花裏。三級浪高魚化龍，癡人猶汲夜塘水。

江南の春風は穏やかにそよぎ，鷓鴣は深い花の中で鳴いている。三段に分けられた川，いわゆる龍門をすでに鯉が登ってしまい龍となったとも知らず，それを待ちわびる人が夜中にこっそりと水を汲み乾して鯉を探しているのがおかしい。

とある。この詩は芳賀幸四郎によれば「天下太平・君臣和楽」などの境涯をよく頌じたものだそうだ。²⁰⁾

鷓鴣詩は唐代の鄭谷からすでに春の季語のようになっていたが，北宋を経て南宋になるとその傾向が一層強まった。その理由は以下の点に求められないだろうか。

- ・唐代の鷓鴣詩では「この宴席には江南出身のお客もいることであるし，春風に向かって鷓鴣を鳴かすことのないように。（南を思い出してお気の毒だから）」と言っており，鷓鴣が春風，すなわち故郷である江南の温暖さを恋しがって鳴くのだ，という想定になっている。鷓鴣は本来季節を問わずに鳴くものであるにもかかわらず「春に鳴く」としたことにより江南をつよく想起させる。そして鷓鴣は南の鳥であることを読者に印象付けることができた。
- ・次に『碧巖録』にある「江南の春風は穏やかにそよぎ，鷓鴣は深い花の中で鳴いている。」では，穏やかな春風と深い花の中で鳴く鷓鴣とを対比させ「天下太平」と意味付けた。一見すると「春風－深い花叢－鷓鴣」という連想から穏やかな情景を思い浮かべるが，鷓鴣は深い花の中に居るのである。決して春風や満開の花に甘んじて心楽しく鳴いているのではなく，反対に深い花の中に隠れているのだ。ここには「飛ぶのが苦手」というメタファーは保存されているけれども，「南を恋しがる」という点が抜けている。すなわち，元来持っていた鷓鴣の属性が変容したと考えられる。その理由は，時代が下ることによって鷓鴣が深い花叢の中で鳴くことが「当たり前的事象」とであると認識されたからではないだろうか。禅宗において「春風－深い花叢」より連想される鷓鴣とは，自分の置かれた境遇に疑うことをせず甘んじて受けとめる，という宗教的解釈を行なった結果である。
- ・さらに「鷓鴣啼在百花香」の如く，「深」字によって「隠」を暗示したものと違

い「百」とした場合、完全に鳥と花との図案である「花鳥画」になってしまっている。この理由も時代が下がったために「南懐」というメタファーが薄れてしまい、「深」よりも「百」が詩語としての完成度や審美的な観点から選択されたと理解すべきであろう。ここに至り、鷓鴣は禅語の中において元々あった鷓鴣の属性から、与えられた境遇を受け入れるもの、さらに「天下太平」「実存そのもの」²¹⁾を表わすものと変化していった。

これらのことから、鷓鴣を用いた禅語がしばしば見られた。

- ・無門関第二十四則にみえる、「語黙離微に涉り、如何にせば通じて不犯なる。(ことばも沈黙も、所詮は実在の反面しか示すことができないが、語っても黙しても実在そのものに通じるにはどうすればよいか)」に対する答え「常憶江南三月裡、鷓鴣啼處百花香。(いつも思い出すのが江南は三月になると、鷓鴣がとりどりの花の中で鳴いていたことだ)」は、杜甫の詩から取られたもので、風穴和尚が「実在そのもの」として示した答である、が定説であった。²²⁾しかし、肝心の杜甫詩が今まで示されていなかった。本稿では以下の詩が下敷きになっていると提示したい。すなわち、杜甫「玄都檀歌。寄元逸人」に「子規夜啼山竹裂、王母晝下雲旗翻。(ホトトギスが夜に鳴くとかなしみで山に生える竹が裂けるよう、それに反して王母鳥は昼に雲の下で長い尾を翻している)」とある。²³⁾「王母」とは「王母使者」のことで、『酉陽雜俎』によれば「足が青く、嘴は赤黄で、白い翼、絳い額の鳥」とのこと。²⁴⁾ホトトギスに関しては「2. 唐代の鷓鴣詩」においても指摘した通り「望郷の念」を暗喩しているが、ここではむしろ「王母」という名の鳥がゆったりと自在に飛ぶ様を「自由自在」であると、この詩を典故にして「鷓鴣がとりどりの花の中でなく＝当たり前の平和な心持ち、天下太平、実在の一例」と連想して生まれた禅語なのではないだろうか。
- ・「禪心已作沾泥絮、不逐東風上下狂。(泥にまみれた柳絮のごとくに禅心は定まって動かず、もはや柳絮が春風を追って上下狂飛するような心の動きもこの身にはない)」という禅語をもじって、清の曹霏(18世紀)『紅樓夢』第91回に「禪心已作沾泥絮、莫向春風舞鷓鴣。(…、春風に向かって鷓鴣舞を舞うな)」とある。このシーンは賈宝玉と林黛玉の長い「精神的桎梏時代」を終わらせる象徴的なやり取りである。いま仮に『紅樓夢』のテーマを二人の純愛であるとすれば、間違いなくクライマックスシーンであると言える。そこに「莫向春風舞鷓鴣」という禅語が出てくるところに鷓鴣詩の歴史の長さが感じられる。

5. 現代における「鷓鴣天」詞

現代においても詞を作る人は多い。本稿ではその中で秋瑾と向天琦を取り上げる。

秋瑾は清末の革命家であり、1904年来日して日本語を学ぶかたわら祖国の為に命を捧げる覚悟を持っていた。また、彼女は刀剣を好んでいたという。彼女の「鷓鴣天」にも「龍泉」という形で刀が出てくる。作品には鷓鴣が元々持っていた「望郷の念」というメタファーが用いられると同時に、「道中困難」をも「革命の道中が困難である」意味に使っており、いわば唐代の詩人と同じような解釈をしている。時代や思想の変遷にもかかわらず、鷓鴣天という詞牌と形式を用いて決意表明を行なっているわけである。しかも、彼女は日本という異郷にあり故郷である中国の現状を嘆いているので、鷓鴣詩の「本意」である「望郷の念」を表現するのに最適であった。

秋瑾（1875—1907）

祖國沉淪感不禁，閑來海外覓知音。金甌已缺總須補，為國犧牲敢惜身。

嗟險阻，嘆飄零。關山萬里作雄行。休言女子非英物，夜夜龍泉壁上鳴。

祖国が零落してしまい、閑散としてからは外国に知己を求めた。黄金の壺のような我が祖国であったが既に欠けてしまい、それをつくらなければならぬので、我身を犠牲にすることを惜しむことは全くない。

険しさを嘆き、零落を惜しむ。どんなに手ごわい山であったとしても必ず行ってみせよう。女に英雄がないというな、夜ごと壁に掛けた宝剣が鳴って私を鼓舞するのだ。

一方、向天琦は『当代诗人选集』（有线装书局2011年）で作品が取り上げられ、ブログの反応も大変多いようだ。

向天琦（1991—）

「鷓鴣天・湘水浅」

一季秋风几度魂，繁花旧日满怀春。镜中楼影朱颜旧，月下亭台黄菊新。

湘水浅，暮云昏。隔江两岸未逢人。望穿秋水伊成梦，雁过西厢不识君。

秋風が何度も私を吹きすぎていき、花々が春の日に満ちていたことを思い出す。

鏡に映る顔やたかどのは以前のままで、月の下には黄菊が咲きだした。

湘水は浅く、夕方は暮れた。でも川を隔ててあの人には逢っていない。秋の川よりあなたを夢みるのだけれど、西の廂を通り過ぎていく雁にはあなたが分からない。

「鷓鴣天・蟬奏一曲秋」

池苑凉柯一曲秋，瑶琴凄楚更添愁。低头泪碎眉心月，临水枝摇花影忧。

兰花指，凤凰楼。红墙银汉隔回眸。禁花醉向西宫落，云鬓相思梦永州。

池のあたりはすっかり秋めいて、玉琴のような蟬の音が憂いを増している。頭を垂れて涙を散らすころ三日月がかかり、水に映った花が憂いているように揺れている。蘭のような指をした人は、美しいかどのにいたのだった。あのきらびやかな場所で見た銀河を追憶する。花のような美しい人は酔って西宮へ（権力ある人のものとなり）、雲のように豊かな髪の人はどこしえに住めるところを夢みている。

「鷓鴣天・夜游宿衡东永宁寺」

夜入东郊宝刹行，先闻寺外水潺声。擎天松柏一江月，解我衣裳半盞风。

读黄卷，伴青灯。浮华似梦岂能争。僧人扫却秋花净，好令新春驻永宁。

夜になって東郊の名刹をおとなうと、まず寺の外に水音を聞いた。松柏の上には月がかかり、私の服にふわっと一風吹いた。

経を読む、細い光の下で。浮世が夢のように思えてくる。僧が秋花を掃き清めると、新しい春が永寧寺に訪れるのだろう。

向天琦の作品は擬古的ではあるが、青年らしい感性で作られている。当代中国において彼が「鷓鴣天」の体裁を用いて詩作しているのは頼もしい。今後の作品に注目したい。

おわりに

中国最古の詩集『詩経』には様々な鳥が出てくるが、鷓鴣はみられない。漢代の辞書には「鳥の名前である」としか書かれておらず、情報量が少ない。六朝に至って鷓鴣の属性が語られるようになり、唐代詩人によって盛んに鷓鴣詩が作られるようになった。李白・白居易を嚆矢とし、唐代では秋の寂しい情景に配されることが多かった。しかし次第に春と結びつけられるようになり、北宋では「別離」が連想される作品が多くなってきた。唐末から盛んになってきた「詞」という韻文形態で詞牌（題名）として「鷓鴣天」ができた。と同時に鳥としての鷓鴣から離れて人事を詠うことが多くなってきた。南宋になると鷓鴣の属性である「懷南」が薄れてきて、「春－深い花叢－鷓鴣」あるいは「春－百花－鷓鴣」のように変容し、禅語の中に組み込まれて「天下太平、実存そのもの」という意味を賦与された。禅語は清代『紅樓夢』のクライマックスシーンにも転用され、現代の秋瑾・当代の向天琦にまで影響を及ぼした。こうしてみると、時代により鷓鴣の意味は変容しているが、中国では鷓鴣に対して一貫して特別な感情を抱いていたように思える。鷓鴣は決して身近にいる鳥ではないが、心惹かれる存在だったのではないか。さもなければほとんど異国の鳥ともいえる鷓鴣が、このように長く題材にされることはなかったのではないだろうか。

池間は「異文化受容の諸相—牡丹と鷓鴣をめぐる考察—」²⁵⁾の結論で「鷓鴣と牡丹は
いずれも唐代において注目されたが、日本に入ってから先は異なる道を行った。現在で
も鷓鴣を知らない人は多いが牡丹を知らない人はいない」と書いた。しかし、中国で
は鷓鴣の知名度は比較的高い。それは様々な「聞きなし」があること、当代ではユー
チューブでも鷓鴣の動画が見えること、料理屋では鷓鴣料理が出されることがまある
こと²⁶⁾、若い詩人が詞牌を使って作品を作っていることなどからも窺える。

なお本稿は、2010年11月14日に京都女子大学で開催された 日本文体論学会第98回大
会で口頭発表したものに、加筆修正した。

付記

池間は『荷風と「紅樓夢」』（日本大学「国際関係研究」第32巻第1号：2011年10月）
において永井荷風のペンネームについて考察を行ない、荷風が東京新聞（昭和29年2
月3日）に寄稿した「私のペンネーム」に「最初草稿執筆の際座敷の床の間に荷風十
里香と云ふ先儒の書のありしより其場の思付にて荷風の二字を用候」とあるのを紹介
した。該論文ではその出典を不明としたが、本稿準備にあたり蔡松年の「鷓鴣天・賞
荷」がそれであると断定できることが分かった。その理由は詞書に「賞荷」とあり、「荷
（ハス）」を歌っていること、冒頭に「十里香」があること、後関はじめに「黛」が見え、
続いて「瀟湘」とあり『紅樓夢』登場人物の林黛玉（号は瀟湘妃子）を彷彿することで
ある。本稿では指摘に留め、別稿で詳しく検証したい。

蔡松年（1107—1159）

- ⑳秀樾横塘十里香，水先晚色静年芳。燕支膚瘦薰沈水，翡翠盤高走夜光。
山黛遠，月波長，幕元秋影照瀟湘。醉魂應逐凌波夢，分付西風此夜涼。

資料：代表的な鷓鴣詩

1. 唐代の鷓鴣詩

李嶠（644—713）

①「鷓鴣」

可憐鷓鴣飛，飛向樹南枝。南枝日照暖，北枝霜露滋。露滋不堪棲，使我常夜啼。原逢雲中
鶴，銜我向寥廓。願作城上鳥，一年生九雛。何不舊巢住，枝弱不得去。
何意道辛苦，客子常畏人。

李白（701—762）

②「山鷓鴣詞」

苦竹嶺頭秋月輝，苦竹南枝鷓鴣飛。嫁得燕山胡雁婿，欲銜我向雁門歸。
山雞翟雉來相勸，南禽多被北禽欺。紫塞嚴霜如劍戟，蒼梧欲巢難背違。
我今誓死不能去，哀鳴驚叫淚沾衣。

③「月中懷古詩」

越王勾踐破吳歸，義士還家盡錦衣。宮女如花滿春殿，只今惟有鷓鴣飛。

李嘉祐 (?-?)

④「題前溪館詩」

今日始知風土異，潯陽南去鷓鴣啼。

李益 (748-827)

⑤「山鷓鴣」

玉關征戍久，空閨人獨愁。寒露濕青苔，別來蓬鬢秋。人坐青樓晚，鶯語百花時。愁多人自老，腸斷君不知。

⑥「鷓鴣詞」

湘江斑竹枝，錦翼鷓鴣飛。處處湘陰合，郎從何處歸。

白居易 (772-846)

⑦「山鷓鴣」

山鷓鴣，朝朝暮暮啼復啼，啼時露白風淒淒。黃茅崗頭秋日晚，苦竹嶺下寒月底。畚田有粟何不啄？石楠有枝何不棲？迢迢不緩復不急，樓上舟中聲閣入。夢鄉遷客展轉臥，抱兒寡婦彷徨立。山鷓鴣，爾本此鄉鳥，生不辭巢不別群，何苦聲聲啼到曉？啼到曉，唯能愁北人，南人慣聞如不聞。

柳宗元 (773-819)

⑧「放鷓鴣詞」

楚越有鳥甘且腴，嘲嘲自名為鷓鴣。

竇鞏 (?-?)

⑨「南遊威興詩」

日暮東風春草綠，鷓鴣飛上越王臺。

杜牧 (803-853)

⑩「越中詩」

石城花暖鷓鴣飛，征客春帆秋不歸。

溫庭筠 (812-866)

⑪「菩薩蠻」

小山重疊金明滅，鬢雲欲度香腮雪。懶起畫蛾眉，弄妝梳洗遲。照花前後鏡，花面交相映。新帖繡羅襦，雙雙金鷓鴣。

李群玉 (?-?)

⑫「九子坂間聞鷓鴣」

落照蒼茫秋早明，鷓鴣啼處遠人行。正穿屈曲崎嶇路，又聽鉤輅格磔聲。此時為爾腸千斷，定是今宵白髮生。

崔塗 (?-?)

⑬「放鷓鴣」

滿身金翠畫不得，無限煙波何處歸。

羅鄴 (?-?)

⑭「放鷓鴣」

花時遷客傷離別，莫向相思樹上啼。

李涉 (?-?)

⑮「鷓鴣詞」

湘江煙水深，沙岸隔楓林。何處鷓鴣飛，日斜斑竹陰。二女虛垂淚，三閭枉自沈。惟有鷓鴣啼，獨傷行客心。

⑯越岡連越井，越鳥更南飛。何處鷓鴣啼，夕煙東嶺歸。嶺頭行人少，天涯北客稀。鷓鴣啼別處，相對淚沾衣。

鄭谷 (849-911)

⑰「鷓鴣詩」

暖戲煙蕪錦翼齊，品流應得近山雞。
雨昏青草湖邊過，落落黃陵廟裡啼。
遊子乍聞微袖濕，佳人纔唱翠眉底。

相呼相應湘江闊，苦竹叢深日向西。

⑱「席上貽歌者」

花月樓臺近九衢，清歌一曲倒金壺。
座中亦有江南客，莫向春風鳴鷓鴣。

2. 北宋の鷓鴣詞

范純仁（1027－1101）

「和韓持國」

⑲臘後春前暖律催，日和風暖欲開梅。公方結客尋佳景，我亦忘形趁酒杯。
添管聞籥，續尊罍。更闌秉燭未能回。清歡莫待相期筓，乘興來時便可來。

聶勝瓊（？－？）

「寄別李生」（「有誰知我此時情」鄧麗君）

⑳玉慘花愁出鳳城。蓮花樓下柳青青，尊前一唱陽關後，別箇人人第五程。
尋好夢，夢難成。況誰知我此時情。枕前淚共簾前雨，隔箇窗兒滴到明。

蘇軾（1036－1101）

㉑林斷山明竹隱牆，亂蟬衰草小池塘。翻空白鳥時時見，照水紅蕖細細香。
村舍外，古城旁，杖藜徐步轉斜陽。殷勤作夜三更雨，又得浮生一日涼。

㉒「陳公密出侍兒素娘，歌紫玉簫曲，勸老人酒。老人飲盡，因為賦此詞」
笑撚紅梅鞦韆翹。揚州十里最妖饒。夜來綺席親曾見，撮得精神滴滴嬌。
嬌後眼，舞時腰。劉郎幾度欲魂消。明朝酒醒知何處，腸斷雲間紫玉簫。

㉓「佳人」

羅帶雙垂畫不成。殢人嬌態最輕盈。酥胸斜抱天邊月，玉手輕彈水面冰。
無限事，許多情。四絃絃竹苦叮嚀。饒君撥盡相思調，待聽梧桐葉落聲。

㉔西塞山邊白鷺飛。桃花流水鱖魚肥。朝廷尚覓元真子，何處於今更有詩。
青箬笠，綠蓑衣。斜風細雨不須歸。人間欲避風波險，一日風波十二時。

鄭少微（？－？）

㉕誰折南枝傍小叢，佳人豐色與梅同。有花無葉真瀟灑，不問胭脂借淡紅。
應未許，嫁春風。天教雪月伴玲瓏。池塘疏影伴幽獨，何似橫斜酒盞中。

黃庭堅 (1045 - 1105)

②⑥「座中有眉山隱客史應之和前韻，即席答之。」

黃菊枝頭生曉寒，人生莫放酒杯乾。風前橫笛斜吹雨，醉裡簪花倒著冠。
身建在，且加餐，無裙歌板盡清歡。黃花白髮相牽挽，付與時人冷眼看。

晏幾道 (1048 - 1118)

②⑦彩袖殷勤捧玉鍾，當年拚卻醉顏紅。舞低楊柳樓心月，歌盡桃花扇底風。
從別後，憶相逢，幾回魂夢與君同。今宵賸把銀釭照，猶恐相逢是夢中。

②⑧守得蓮開結伴游，越開萍葉上蘭舟。來時浦口雲隨棹，采罷江邊月滿樓。
花不語，水空流，年年拚得為花愁。明朝萬一西風動，爭向朱顏不耐秋。

②⑨醉拍春衫惜舊香，天將離恨腦疏狂。年年陌上生秋草，日日樓中到夕陽。
雲渺渺，水茫茫，征人歸路許多長。相思本是無憑語，莫向花箋費淚行。

③⑩小令尊前見玉簫，銀燈一曲太妖嬈。歌中醉倒誰能恨，唱罷歸來酒未消。
春悄悄，夜迢迢，碧雲天共楚宮遙。夢魂慣得無拘檢，又踏楊花過謝橋。

③⑪十裡樓臺倚翠微，百花深處杜鵑啼。殷勤自與行人語，不似流鶯取次飛。
警夢覺，弄晴時，聲聲只道不如歸。天涯豈是無歸意，爭奈歸期未可期。

③⑫陌上濛濛殘絮飛，杜鵑花裡杜鵑啼。年年底事不歸去，怨月愁煙長為誰。
梅雨細，曉風微，倚樓人聽欲沾衣。故園三度群花謝，曼倩天涯猶未歸。

③⑬當日佳期鵲誤傳，至今猶作斷腸仙。橋成漢渚星波外，人在鶯歌鳳舞前。
歡盡夜，別經年，別多歡少奈何天。情知此會無長計，呖尺涼蟾亦未圓。

③⑭手拈香箋憶小蓮，欲將遺恨倩誰傳。歸來獨臥逍遙夜，夢裡相逢酩酊天。
花易落，月難圓，只應花月似歡緣。秦箏算有心情在，試寫離聲入舊弦。

秦觀 (1049 - 1100) (李清照作との説あり)

③⑮枝上流鶯和淚聞，新啼痕間舊啼痕。一春魚鳥無消息，千里關山勞夢魂。
無一語，對芳樽，安排腸斷到黃昏。甬能靈得燈兒了，雨打梨花深閉門。

3. 金の鷓鴣詞

劉著（？—？）

- ③⑥雪照山城玉指寒，一聲羌管怨樓間。江南幾度梅花發，人在天涯鬢已斑。
星點點，月閉閉。倒流河漢入杯盤。翰林風月三千首，寄與吳姬忍淚看。

葛勝仲（1072—1144）

- ③⑧玉珩還飛換歲灰，定山新棹酒船回。年時梁燕雙雙在，肯為人愁便不來。
衰意緒，病情懷。玉山今夜為誰頹，年時梅蕊垂垂破，肯為人愁便不開。

蔡松年（1107—1159）

- ③⑧秀樾橫唐十里香，水先晚色靜年芳。燕支膚瘦薰沈水，翡翠盤高走夜光。
山黛遠，月波長，暮元秋影照瀟湘。醉魂應逐凌波夢，分付西風此夜涼。

元好問（1190—1257）

- ③⑨「隆德故宮，同希顏，欽叔，知幾諸人賦」
臨錦堂前春水波，蘭皋亭下落梅多。三山宮闕空銀海，萬里風埃暗綺羅。
雲子酒，雪兒歌。留連風月共婆娑。人間更有傷心處，奈得劉伶醉後何。
- ④⑩華表歸來老令威，頭皮留在姓名非。舊時逆旅黃梁飯，今日田家白板扉。
沽酒市，釣魚磯。愛閑直與世相違。墓頭不要征西字，元是中原一布衣。

3. 南宋の鷓鴣詞

朱敦儒（1081—1159）

- ④①「西都作」
我是清都山水郎，天教懶慢帶疏狂。曾批給露支風敕，累奏留雲借月章。
詩萬首，酒千觴，幾曾著眼看侯王？玉樓金闕慵歸去，且插梅花醉洛陽。
- ④②曾為梅花醉不歸，佳人挽袖乞新詞。輕紅遍寫鴛鴦帶，濃碧爭斟翡翠卮。
人已老，事皆非。花前不飲淚沾衣。如今但欲關門睡，一任梅花作雪飛。
- ④③檢盡歷頭冬又殘，愛他風雪忍他寒。拖條竹杖家家酒，上個藍輿處處山。
添老大，轉癡頑。謝天教我老來閑。道人還了鴛鴦債，紙帳梅花醉夢間。
- ④④唱得梨園絕代聲，前朝惟數李夫人。自從驚破霓裳後，楚秦吳歌扇裡新。
秦嶂雁，越溪沾。西風北客兩飄零。尊前忽聽當時曲，側帽停杯淚滿巾。

周紫之 (1082 - 1155)

- ④⑤一點殘紅欲盡時。乍涼秋氣滿屏幃。梧桐葉上三更雨，葉葉聲聲是別離。
調寶瑟，撥金猊。那時同唱鷓鴣詞。如今風雨西樓夜，不聽清歌夜淚垂。

李清照 (1084 - 1153?)

- ④⑥寒日蕭蕭上鎖窗，梧桐應恨夜來霜。酒闌更喜團茶苦，夢斷偏宜瑞腦香。
秋已盡，日猶長，仲宣懷遠更淒涼。不如隨分尊前醉，莫負東籬菊蕊黃。
- ④⑦暗淡輕黃體性柔，情疏跡遠只香留。何須淺碧深紅色，自是花中第一流。
梅定妒，菊應羞，畫欄開處冠中秋。騷人可熬無情思，何事當年不見收。

朱淑真 (? - ?)

- ④⑧獨倚欄杆晝日長，紛紛蜂蝶斗輕狂。一天飛絮東風惡，滿路桃花春水香。
當此際，意偏長。萋萋芳草傍池塘。千鐘尚欲偕春醉，幸有荼蘼與海棠。

向子諲 (1085 - 1152)

- ④⑨說著分飛百種猜，泥人細數幾時回。風流可慣長孤冷，懷抱如何得好開。
垂玉箸，下香階，并肩小語更兜鞋。再三抹遣歸期誤，第一頻數入夢來。

石孝友 (? - ?)

- ⑤⑩一夜冰漸滿玉壺，五更喜氣動洪爐。門前桃李如麟集，庭下芝蘭看鯉趨。
泉脈動，草心蘇。日長忝得繡工夫。試詢補袞彌縫手，真個曾添一線無？
- ⑤⑪別後應憐信息疏，西風幾度到庭梧。夜來縱有鴛鴦夢，春去空餘蛺蝶圖。
煙樹遠，塞鴻孤。垂垂天影帶平蕪。憑誰寫此相思去，寄與馮川鄭小奴。

陸游 (1125 - 1210)

- ⑤⑫家住蒼煙落照間，絲毫塵事不相關。斟殘玉瀝行穿竹，卷罷黃庭臥看山。
貪嘯傲，任衰殘，不妨隨處一開顏。元知造物心腸別，老卻英雄似等閒。

尤袤 (1125 - 1194)

- ⑤⑬『瑞鷓鴣』「詠落梅」
清溪西畔小橋東，落月紛紛水映空。五夜客愁花片裡，一年春事角聲中。
歌殘『玉樹』人何在，舞破『山香』曲未終。卻憶孤山醉歸路，馬蹄香雪村東風。

張孝祥（1132－1169）

⑤4 日日青樓醉夢中，不知樓外已春濃。杏花未濕疏疏雨，楊柳初搖短短風。
扶畫鷁，躍花驄。涌金門外小橋東。行行又入笙歌裡，人在珠帘第幾重。

辛棄疾（1140－1207）

⑤5 陌上柔桑破嫩芽，東鄰蠶種已生些。平岡細草鳴黃犢，斜日寒林點暮鴉。
山遠近，路橫斜，青旗沽酒有人家。城中桃李愁風雨，春在溪頭薺菜花。

⑤6 「有客慨然談功名，因追念少年事，戲作」

壯歲旌旗擁萬夫，錦澹突騎渡江初。燕兵夜妮銀胡〔革录〕，漢箭朝飛金僕姑。
追往事，嘆今吾，春風不染白髭須。卻將萬字平戎策，換得東家種樹書。

⑤7 「游鵝湖醉書酒家壁」

春日平原薺菜花，新耕雨後落群鴉。多情白獸春無奈，昨日青簾酒易賒。
閒意態，細生涯，牛欄西畔有桑麻。青裙縞袂誰家女，去趁蠶生看外家。

⑤8 著意尋春懶便回，何如信步兩三杯。山才好處行還倦，詩未成時雨早催。
攜竹杖，更芒鞋，朱朱粉粉野蒿開。誰家寒食歸寧女，笑語柔柔陌上來。

⑤9 「戲題村舍」

雞鳴成群晚不收，桑麻長過屋山頭。有何不可吾方羨，要底都無飽便休。
新柳樹，舊沙州，去年溪打那邊流。自言此地生兒女，不嫁金家即聘周。

⑥0 鵝湖歸病起作

枕簟溪堂冷欲秋，斷雲依水晚來收。紅蓮相依渾如醉，白鳥無言定自愁。
書咄咄，且休休，一丘一壑也風流。不知筋力衰多少，但絕新來懶上樓。

⑥1 「送人」

唱徹陽關淚未干，功名餘事且加餐。浮天水送無窮樹，帶雨雲埋一半山。
今古恨，幾千般，只應離合是悲歡。江頭未是風波惡，別有人間行路難。

⑥2 「代人賦」

晚日寒鴉一片愁。柳塘新綠卻溫柔。若教眼底無離恨，不信人間有白頭。
腸已斷，淚難收。相思重上小紅樓。情知已被山遮斷，頻倚闌干不自由。

⑥③ 「和子似山行韻」

誰共春光管日華，朱朱粉粉野蒿花。閒愁投老無多子，酒病而今較減些。
山遠近，路橫斜，正無聊處管弦嘩。去年醉處猶能記，細數溪邊第幾家。

⑥④ 一片歸心擬亂雲，春來語盡惡黃昏。不堪向晚檐前雨，又待今宵滴夢魂。
爐爐冷，鼎香氛，酒寒誰遣為重溫。何人柳外橫斜笛，客耳那堪不忍聞。

⑥⑤ 困不成眠奈夜何，情知歸未轉愁多。暗將往事思量遍，誰把多情惱亂他。
些底事，誤人哪，不成真個不思家。嬌痴卻妒香香睡，喚起醒松說夢些。

⑥⑥ 「讀淵明時不能去手，戲作小詞以送之」

晚歲躬耕不怨貧，只雞斗酒聚比鄰。都無晉宋之間事，自是羲皇以上人。
千載後，百篇存，更無一字不清真。若教王謝諸郎在，未抵柴桑陌上塵。

⑥⑦ 浴場高樓去避愁，愁還隨我上高樓。經行幾處江山改，多少親朋盡白頭。
歸休去，去歸休，不成人總要封侯。浮雲出處元無定，得似浮雲也自由。

⑥⑧ 山上飛泉萬斛珠，懸涯千丈落甍。已通樵徑行還礙，似有人聲聽卻無。
閑略約，遠浮屠，溪南修竹有茅廬。莫嫌杖履頻來往，此地偏宜著老夫。

嚴仁（？-？）

⑥⑨ 一曲危弦斷客腸，津橋捩柁轉牙樁。江心雲帶蒲帆重，樓上風吹粉淚香。
瑤草碧，柳芽黃。載將離恨過瀟湘。請君看取東流水，方識人間別意長。

⑦⑩ 行盡春山春事空，別愁離恨滿江東。三更鼓潤官樓雨，五夜燈殘客舍風。
寒淡淡，曉朧朧。黃雞催新丑時鐘。紫駟嚼勒金銜響，衝破飛花一道紅。

⑦⑪ 多病春來事事慵，偶因撲蝶到庭中。落紅萬疊花經雨，斜碧千條柳因風。
深院宇，小簾櫳。幾年離別恰相逢。擊觴未飲心先醉，為有春愁似酒濃。

⑦⑫ 一曲危弦斷客腸，津橋捩柁轉牙樁。江心雲帶蒲帆重，樓上風吹粉淚香。
瑤草碧，柳芽黃。載將離恨過瀟湘。請君看取東流水，方識人間別意長。

⑦⑬ 病去那知春事深。流鶯喚起惜春心。桐舒碧葉慳三寸，柳引金絲可一尋。
憐繡閣，對雲岑。苦無多力懶登臨。翠羅衫底寒猶在，弱骨難支瘦不禁。

⑦④高杏酣酣出短牆。垂楊嫋嫋蘸池塘。文鴛藉草眠春晝，金鯉吹波弄夕陽。
閒倚鏡，理明妝。自翻銀葉炷衙香。鳴鞭已過青樓曲，不是劉郎定阮郎。

⑦⑤公子詩成著錦袍。王家桃葉舊妖嬈。檀槽縱急斜金雁，彩袖翩躚蹕翠翹。
沈水過，懶重燒。十分濃醉十分嬌。複羅帳裏春寒少，只恐香酥拍漸消。

盧祖皋（？-？）

⑦⑥庭綠初圓結蔭濃，春溝收拾樹梢紅。池塘少歇鳴蛙雨，帘幕輕回舞燕風。
春又老，笑誰同。澹煙斜日小樓東。相思一曲臨風笛，吹過雲山第幾重。

姜夔（1154-1221）

⑦⑦京洛風流絕代人。因何風絮落溪津。籠鞋淺出鴉頭襪，知是淩波縹緲身。
紅乍笑，綠長顰。與誰同度可憐春。鴛鴦獨宿何曾慣，化作西樓一縷雲。

⑦⑧肥水東流無盡期。當初不合種相思。夢中未比丹青見，暗裡忽警山鳥啼。
春未綠，鬢先絲。人間別久不成悲。誰教歲歲紅蓮夜，兩處沈吟各自知。

周密（1232-1298）

⑦⑨「清明」

燕子時時度翠帘，柳寒猶未透香綿。落花門巷家家雨，新火樓臺處處煙。
情默默，恨恹恹。東風吹動畫秋千。刺桐開盡聲聲鳥，無奈春風只醉眠。

⑦⑩相傍清明更慳，閉門空自惜花殘。海棠半拆難禁雨，燕子初歸不奈寒。
金鴨冷，錦鴛閑。銀缸空照小屏山。翠羅袖薄東風悄，獨倚西樓第幾欄。

魏初（？-？）

⑦⑪去歲今辰卻到家，今年相望又天涯。一春心事閑無處，兩鬢秋霜細有華。
山接水，水明霞。滿林殘照見歸鴉。何時收拾田園了，兒女團圓夜煮茶。

無名氏

⑦⑫「上元」

宣德樓前雪未融，賀正人見彩山紅。九衢照影紛紛月，萬井吹香細細風。
復道遠，暗相通。平陽主第五王宮。風蕭聲裡春寒淺，不到珠帘第二重。

耶律楚材（1190－1244）

⑧「題七真詞」

花界傾頽事已遷，浩歌遙望意茫然。江山王氣空千劫，桃李春風又一年。
橫翠嶂，架寒煙，野花平碧怨啼鶯。不知何限人間夢，并觸沈思到酒邊。

李冶（1192－1279）

⑧「中秋同遺山飲倪文仲家蓮花白，醉中賦此。」

太乙滄波下酒星，露醞秘訣出仙扃。情知天上蓮花白，壓盡人間竹葉青。
迷晚色，散秋聲。兵廚曉溜玉泠泠。楚江雲錦三千頃，笑殺靈均語獨醒。

4. 元代の鷓鴣詞

楊立齋（？－？）

⑧「聽楊玉娥唱故人所撰曲有感」

煙柳風花錦簇筵，霜芽露葉玉裝船。誰知皓齒纖腰會，只在輕衫短帽邊。
啼粉靨，咽冰弦。舊游一去更無傳。詞人彩筆佳人口，再喚春風到眼前。

蔡柁（？－？）

⑧病酒恹恹與睡宜，珠帘羅幕卷銀泥。風來綠樹花含笑，恨入西樓月斂眉。
驚瘦盡，怨歸遲。休將桐葉更題詩。不知橋下無情水，流到天涯是幾時。

許棐（？－？）

⑧翠鳳金鸞繡欲成，沈香亭下款心晴。綠髓楊柳陰邊去，紅踏桃花片上行。
鶯意緒，蝶心情，一時分付小銀箏。歸來欲醉花柔暈，月濾窗紗約半更。

晁端（？－？）

⑧「荼靡」

紅紫飄零綠滿城，春風於此獨留情。誰將十幅吳綾被，撲向熏籠一夜明。
風不定，雨初晴，曉來苔上拾殘英。速教貯向鴛鴦枕，猶有餘香入夢清。

馮子振（1257－1327）

⑧「贈歌兒珠帘秀」

十二闌幹映遠眸，醉香空斷楚天秋。蝦（魚）須影薄微微見，龜背紋輕細細浮。
香霧斂，翠雲收，海霞為帶玉為鉤。夜來卷盡西山雨，不著人間半點愁。

4. その他

秋瑾 (1875-1907)

- ㊦祖國沉淪感不禁，閑來海外覓知音。金甌已缺總須補，為國犧牲敢惜身。
嗟險阻，嘆飄零。關山萬里作雄行。休言女子非英物，夜夜龍泉壁上鳴。

参考文献

- 『樂府詩集』中華書局出版 1979年
『紅樓夢』上・下 人民文学出版社 1982年
『詞綜』上海古籍出版社 1999年
『国乐名家名曲 传统篇』中国唱片深圳公司出版 2010年
『大日本続蔵経』藝文院書館 1961年

注

- 1) 許慎『説文解字』中華書局出版 1979年 p.84
- 2) 蕭統『文選』上海古籍出版社 1986年 p.213
- 3) 崔豹『古今注』
- 4) 顧野王『玉篇校釋』上海古籍出版社 1989年 p.4729 和訳は池間。
- 5) 韦明铤『闲敲棋子落灯花-中国古代游戏文化』云南人民出版社 2007年 p.304
- 6) 段成式・今村与志雄訳『酉陽雜俎』平凡社東洋文庫397 第3巻1981年 p.119 なお、段公路は段成式の父。
- 7) 前掲書『酉陽雜俎』p.113
- 8) 前掲書『酉陽雜俎』p.119
- 9) 李時珍『本草綱目』卷48 鼎文書局 1974年 p.1456
- 10) 王圻『三才図絵』上海古籍出版社 1985年 p.2168
- 11) 『唐詩鳥類圖鑑』城邦文化事業 2003年 pp.96-97
- 12) 韦明铤・前掲書 p.304
- 13) 茨城大学人文学部紀要『人文科学論集』36号2000年「鷓鴣」電子版<http://chubun.hum.ibaraki.ac.jp/kano/peper/piya/36syako.htm>
- 14) 前掲書『酉陽雜俎』p.132
- 15) 詩の訳は池間。以下同じ。
- 16) 御製『詞譜』殿印本縮印 聞汝賢 民国53 (1965) 年 p.205
- 17) 明銘「唱鷓鴣与舞鷓鴣」『紅樓夢研究集刊』所収 1980年 p.352
- 18) なお、明銘論文には以下も書かれている。
 - ・劉東生『嬌紅記』では開場の際、まず鷓鴣舞を舞った。この舞は女真族の舞だという。
 - ・『青樓集』では一人舞といい、『十長生』では四人舞という。普通笛の伴奏がつく。

- 19) <http://chinese-poem.net/firms.com> 「詞詩考釋」より
- 20) 芳賀幸四郎『新版一行物一禪語の茶掛』淡交社 1996年 p.504
- 21) 道潜和尚『苕溪漁隱叢話』世界書局 2009年
- 22) 西村恵信『無門関』岩波文庫 1994年 p.103
- 23) <http://art.pch.scu.edu.tw/> 「杜甫詩集」2254
- 24) 前掲書『酉陽雜俎』p.137
- 25) 『異文化受容の諸相—牡丹と鷓鴣をめぐる考察—』日本大学「国際関係研究」第31巻
2号 2011年 p.115
- 26) 前掲論文『異文化受容の諸相—牡丹と鷓鴣をめぐる考察—』p.113